

第2回 留学生里親・里子だより

●「留学生さとおやの会」事務局 〒540-0003 大阪市中央区森ノ宮中央1-6-20 (株)サクラクレパス内
TEL:(06)6910-8800 FAX:(06)6910-8837

2005年3月発行



里親里子事業を引き継いで 八木 淳

お父さん、お母さんご苦労様でした。そして、里子の皆さん、里親の家族として楽しいひとときを過ごしてきたと思います。大阪商工会議所が20数年前に音頭を取って下さいました。引き続いて、サクラクレパスの社長さんが受け継いでいただき、私達は長く有益な事業を引き継いで来られました。30年近く里親里子の事業を続けられた例は他には無いと思います。この間里親としてなりふりかまわず、毎年紹介される里子の面倒を見てこられたお父さん、お母さんの熱意には頭の下がる気がします。中にはいろんなトラブルもあったでしょう。それを乗り越えて温かい心で、里親の自負心を持ち続けてこられた里親の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。いろんな国からやってきた里子を気持ちよく、そして温かく迎えてやっていただき、時には里子の心の拠り所となって下さいました。日本に滞在している里子も、自分の故郷へ帰って、色々な仕事に従事している里子も、大阪で温かい家族の一員として受けた肌のぬくもりを未だに感じていると思います。この里親里子事業がこれからも末長く続くことを願い、お父さん、お母さんのことを、里子たちがいつまでも覚えていてくれることを、心より願っております。

日本の父、八木先生と出会って

ばく そく すう
朴 碩 洙(韓国)

2003年4月、私は関西学友会日本語学校に入学しました。びっくりすることに私の日本での生活は幸運の連続でした。

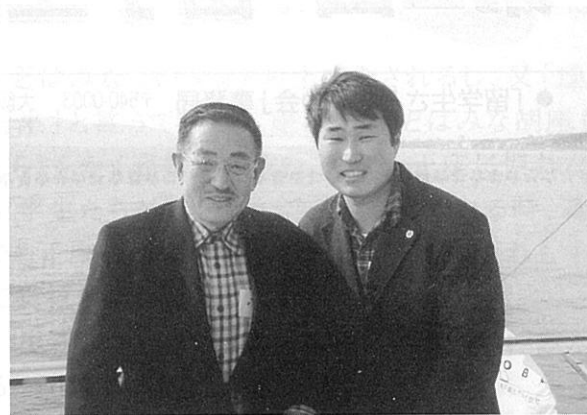
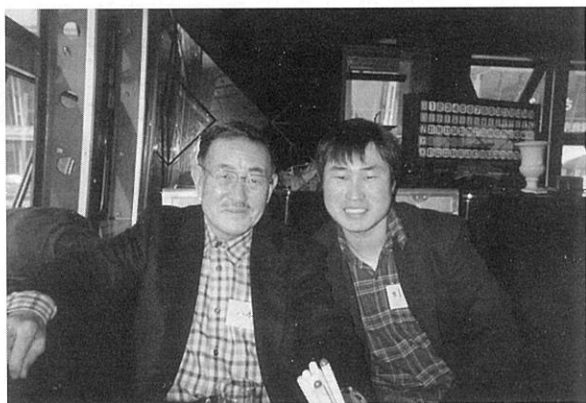
なぜか私は抽選によく当たるようになったのです。まず、はじめは文楽の招待券、そして、次には天神祭を特等席で見ることができ、日本の文化に直にふれる事ができました。そして、私が何よりも嬉しかったのはやはり里子に選ばれたことです。里子を希望したクラスメートは大勢おり、選ばれた私は皆にすぐくうらやましがられました。

はじめて里親と対面できる日、私は少し期待をしていました。それは、私の韓国の父と同じぐらいの年の方だといいなあということです。私は9人兄弟の末子で、父とは年が随分離れています。私は父を尊敬し、大好きです。その事は誰にも話をしていなかったのですが、なんと私の里親になって下さった八木先生は私の期待していた通りの方でした。私は本当に感激しました。

日本語もまだ上手ではないですし、はじめてですから、なかなかうまく話をする事ができなかったのですが、梅田の空中庭園に連れて行って下さり、楽しい雰囲気の中でリラックスできるようにして下さいました。天気も素晴らしく大阪市内の全部が見渡せました。こんなに天気が良いのは珍しいことなのだそうです。やはり、私は日本に来て運が良くなったようです。

その後も、八木先生は時々、電話をかけてきて下さり、いろんな所に連れて行って下さいます。神戸で韓国人のクラシックコンサートがあった時は歯が痛いのを我慢して、私のために一緒に行って下さいました。

琵琶湖へ旅行に行ったり、先生のご自宅で露天風呂に入ったり…。日本での生活を楽めるようにいろいろ計画して下さいます。



出かける事も、もちろん楽しいのですが、一緒にごはんを食べたりしながら、八木先生がいつも、とても興味深いお話をして下さいます。大阪の昔の話や文化の話など、どれも私にはとても勉強になる事ばかりです。

私は、今年の4月から大学に入学しました。受験の時は、八木先生がいろいろ心配して、時々電話をかけてきて下さいました。慣れない国での受験で、私も不安がいっぱいあったのですが、八木先生はいつも「頑張ってください」と励まして下さいました。八木先生は、いつも暖かく私たち里子の事を気にかけて下さいます。

今まで里子だった先輩方とも、ずっと親交があるのも先生のお人柄のせいでしょう。八木先生は20年以上留学生の面倒を見てこられたそうです。このような、長期間続けるのは、大変な事だったと思いますけれども、今もずっとこのような活動をされている事は、私はすごく素晴らしいと思います。

八木先生は、家族と離れて日本で勉強を続ける私たち留学生にとって、本当の父親のように頼りになり、心の支えになって下さっています。八木先生がいて下さらなかつたら、私の日本での生活は、もっと寂しいものとなったでしょう。今、私は感謝の気持ちでいっぱいです。

私は4年間、日本で勉強を続けるつもりです。これから、もっともっと八木先生の側において、いろいろ教えて頂きたいと思っています。

私がしっかり勉強して、人間的にも立派に成長していく事が、今の私にできる先生への恩返しだと思って、しっかりと、頑張っていくつもりです。

八木先生これからも、ずっとお元気でいて下さい。そして、私たち、留学生の成長を見守っていて下さい。いつも、ありがとうございます。これからも、よろしくお願い致します。

里親の思い出

私は日本の文化に興味があるので2002年10月に日本に来ました。これは初めての海外生活なので、興奮の気持ちもあるし不安の気持ちもあります。日本の文化と習慣を理解できるように学校の事務所を通じて留学生里親の会を申し込みました。初めての里親との対面は大阪商工会議所でした。私の里親八木先生、メガネをかけて学者のような方、とても親切なおじいさんでした。

初めての対面会

初めての対面会、八木先生は私と同じ里子の韓国の方、朴さんを連れて大阪駅近くの空中庭園展望台に行きました。立派なビルの屋上で360度の大パノラマで大阪の街を見ることができます。見ながら先生は大阪の街の地理と歴史を紹介してくれました。先生は大阪に対する知識をよく持っているので私は聞いたときいろいろ勉強しました。

先生の趣味

先生は旅行が好きで今まで世界各地行ける所はほとんど行きました。家の中にいろんな飾り物があります。アラスカのマスクとかインドの石飾りなど世界各地から集まった飾り物があります。その中で私は一番印象があるの一枚の写真です。これは先生がアジアの子供たちと一緒に撮った写真です。写真中の先生はニコニコの笑顔をして子供たちも笑って笑い声が聞こえるようないい写真と思いました。

先生との交流

普段は一ヶ月一回私たちは先生と一緒に食事をします。ある時お宅へ行って息子さんの手作り料



李宗翰(台湾)



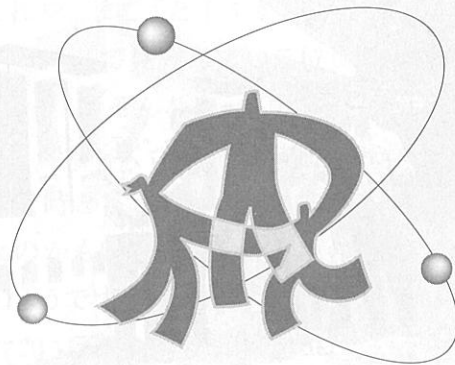
理をご馳走になり、またある時は外のレストランでご馳走になることもあります。毎回食事する時、今年の里子だけでなく去年の里子の先輩、知り合った若者を誘ってみんな楽しく食事をします。

先生と一緒に一泊旅行することもあります。今年冬の終わり頃、先生は若者たちを連れて琵琶湖へ旅行に行きました。琵琶湖ホテルで一緒にお風呂に入り、夜、食事後カラオケボックスで歌を歌いました。先生の歌は上手ですけど、私の時代の歌じゃないからぜんぜん聞いたことがありませんでした。

知り合ってよかった

先生は里子に対していつも関心を持って、留学生の私は感謝します。わたしの日本語がまだ上達していないので時々先生と話した時言いたい言葉が言えません。でも先生はいつもゆっくり聞いてゆっくり私に話します。

感謝の気持ちが今は日本語の言葉で表現できません。でも、先生、ありがとう。知り合ってよかったです。



里子の国の両親を訪ねて

日下 淑子

スリランカのマドゥランガ君は当「留学生さとおやの会」の前身、大阪商工会議所の「留学生里親制度」の最後の年(2002年)の里子で、私が彼の里親になりました。彼はその頃、昼間は学友会で日本語を学び、夕方からは難波の喫茶店でアルバイトをしていました。夏休みも冬休みも勉強とアルバイトで忙しく、家族に会いに帰国するような余裕は全くありませんでした。一方、私共は大阪商工会議所の「留学生里親制度」の発足時(1978年)にスリランカの留学生の里親になって以来、スリランカとの付き合いを続けていますから、スリランカを訪問することも度重ねているのです。私共は2003年4月に、スリランカへ10数度目の訪問をすることにしました。マドゥランガ君にそのことを告げると、彼は「是非私の家に行って、両親に会って来て下さい。」と言うのです。しかし彼が国を出てから、両親は引っ越されたようで、引っ越し先の家には彼が行ったことがないので、家の在り処を正確に知りませんでした。それで彼は家に電話して、家の所在を確かめ、どうにか地図を書くことができました。それを頼りに、私共は旅の途中でやっとその家を探し当て、彼の両親と弟さん、妹さんに会うことが出来ました。

私共を見ると両親は大変喜んで下さり、特にお母さんは「マドゥランガはどうしていますか。元気になっていますか。マドゥランガに会いたいよう・・・」と、目に一杯涙を浮かべて言われるのでした。会話は

もちろんスリランカの言語、シンハラ語です。私共はこの10年間、留学生の国、スリランカの言葉を勉強して、ある程度の会話は分かるのです。それで、彼のお母さんの言っていることは良く分かり、息子と思う母親の気持ちを痛いほど汲み取ることが出来ました。そして、「マドゥランガ君は元気になっていますよ。勉強に励んでいますよ。」と私は話して、長い間顔を見ていない息子のことを案じているお母さんを慰めることが出来ました。

私と夫が訪問することは、マドゥランガ君が前もって両親に連絡してくれていたもので、遠い所からやって来た私共を、両親は心から歓待して下さいました。大きな椰子の木の下にテーブルを置き、トロピカルフルーツや甘いお菓子と本場のセイロンティーを頂きながら、日本でのマドゥランガ君の様子を伝える事が出来、私は大きな役割を果たしたような何とも言えない満たされた気持ちになったのでした。

このように留学生を通じて、今まで知らなかった国のことや、そこで生活する人々の暮らしを知ると、ぐんと世界が広がるのを感じます。世界が広がると、そこには多様な文化があることが分かり、それを受け入れることが出来るようになり、その結果豊かな気分を味わうことが出来ると思うのです。

「留学生さとおやの会」は、留学生のためだけでなく、私たち日本人の心の成長のために大いに役立っていると私は思っているのです。



引っ越したばかりのマドゥランガ君の家の前で
マドゥランガ君の家族と共に



庭の椰子の木の下でアフタヌーンティーを頂く

留学生レポート

私の第二の故郷は大阪です。留学しているとき商工会議所の里親制度に参加していました。

留学生のためにいろいろなイベントが行われ、日本の祭りや伝統的な行事などに参加でき、おかげで素晴らしい5年間半を過ごしました。本当によかったと思います。ところが、資金の都合でこの制度を中止しなければならないと聞いたとき、本当にがっかりしました。留学生にとっては残念なことです。有志のボランティア皆様の力を結集し、この制度を復活されるようになったこと、心から感謝しております。

大阪に居たとき親切な人といっぱい出会いました。困ったときとか、落ち込んだときとかたくさんの方々に支えられ乗り越えてきました。大阪府立大学を卒業し台湾に帰国いたしました。それから、3年経ちましたが縁在り台湾の国際交流員として、再び日本に帰って参りました。

国際交流員の仕事は学生時代聞いたことがありません。

私は初めての台湾からの国際交流員に選ばれ、

里子と出会えて

対面式を通して、多くの留学生の方と出会う機会を得ました。それぞれの里子が、いろんな問題を抱えていました。

勉強についていくこと、アルバイトのこと、生活費、友人、恋人、体の健康、職場の人間関係、国に残した家族、ビザ、盗難、このまま日本に残るのか、国に帰るのかなど。笑っていても、本当は一人で外国にいるという孤独感を抱えて、不安いっぱい暮らしているようです。当然のことでしょう。そんな時地震など来れば、耐えられないことでしょう。

初めの頃は、珍しい、おいしい料理を出したり、観光地に連れて行ったりして、日本を味わってもらい、喜んでもらう事が、お世話かなと思った時期もあり

鳥取県国際課勤務 洪 佳 琪

不安を抱いて鳥取県庁に赴任いたしました。鳥取は大阪より『スーパーはくと』で2時間20分ぐらいかかります。鳥取砂丘と二十世紀梨がよく知られています。世界の国際交流員と一堂に会して県民の方々に国の現状と習慣の違いを教えています。又日本と台湾の中央、地方の政府高官レベルの交流をはじめ農業、観光、文化、青少年、マスコミ分野等の交流をします。私自身も鳥取の祭りや農業、漁業視察など夜遅くまで交流を深めるため参加しております。心が疲れたら大阪の里親さんの家に帰り又元気で仕事に鳥取へ行きます。

大阪でお世話になった分を、もっと多くの国際交流に興味のある方々にお役に立てればいいと考えます。これから鳥取県や日本の皆様と台湾の架け橋として頑張りたいと思っています。



田 仲 八重子

ました。彼らの問題を一緒に考え、行きづまり、また道を探して考えているうちに、気持ちが溶け合っていくようです。彼らは若い生きる力を持っています。悩んでいる時でさえも、何かエネルギーを感じます。あれこれやこまごまと手をかけることもありますが、結局そばにいて見守っている位しか出来ないのかもしれない。そんな中、自分の力で何とか道を開いていく姿をいくつも見てまいりました。人と人が結びつく時と言うのは、一緒に辛い事を乗り切った時なのかもしれません。里親の仕事は、地味な仕事のようなのですが、地味だからこそ過激にならず長く続けていけるのかもしれないなというふうにも思えます。

国際交流「留学生さとおやの会」対面式に参加して

唐澤清司

(留学生さとおやの会対面式会場内)

対面を待っている留学生の期待と不安が入り混じった顔、顔、顔、顔。

(ペアリングのため名前が呼ばれる)

はい。一瞬、背筋を伸ばし、恐る恐る周りを見る。里親も立ち上がり、目と目が合う。日頃学校では見せたことのないあどけなさも残るうれしそうな表情。

(対面)

里親と里子挨拶、お互いに握手、里親に促され、手をつないだりしてテーブルにつく。はじめはぎこちなく話が始まるが里親達の巧みな誘導で会話がはずむ。そんな、はにかみながらの笑顔の中に「やっと日本での居場所が見つかった。優しく包んでくれる人が出来た。たった一人ではない……。」といった表情にも見える。

なぜなら、彼ら留学生は誕生以来、20年近く慣れ親しんだ母国を、温かく見守り育ててくれた親元を離れ、来日の強い希望を有して来日したものの、勝手分からぬ地での生活に不安感でいっぱいの学生がほとんどである。言葉も分からない、見知らぬ異国の地へと第一歩を踏み出したばかりなのである。

私が日本語教員として留学生と交流を重ねているうちに感じたことは、彼らが理解を示したりする時は彼ら自身の存在が認められた時、その持てる力・能力を十二分に発揮し、その上、一番輝ける行動が行える時である。このことについては洋の東西を問わず、人はいずれも同じである、ということ。できることなら、留学先を我国に選んでくれた外国人留学生を一人でも、親が子を支えるように優しく包み込んで安心して学べる体制を整えてやるのができれば、真の心の交流につながるのではないだろうか。少しでも早く日本に慣れたい、日本を知りたい留学生に手を差し伸べてあげることができるなら、入国管理局の保証人制度がなくなった今、連絡人

という名の人がいなくても、文化の異なる日本に心から頼れる人が他にいない身の上である。

従って、さとおやの会のような機会、チャンス、場を少しでも多く留学生達に経験させることができれば、国際交流の場としての「留学生さとおやの会」は留学生には頼もしい、素晴らしい会に発展していくであろう。日本の社会で生きている、生き抜いてきた諸先輩の貴重なアドバイスや指導は、無垢な留学生達にはどんなに心強く、頼りになる存在であろうか。未体験の異文化(社会)に触れること、その中で試行錯誤を繰り返すこと、そして身をもって感じ悩むこと、その度毎に成長し、進化し、国際人としての能力を培われ、真の留学の目標へ一段と近づいていく。また、その交流で留学生に接している私達自身も異文化を感じ、それを咀嚼吸収することによって、国際人への一歩が踏み出せるであろう。余所行き交流ではなく、ありのまま、普段着の交流が自然のなりゆきの中でできたら、彼らは本当の日本を知ることができ、交流の真の意味を理解し、日本留学の一助となるであろう。

一人でも多くの人に里親になっていただき、交流を希望している留学生に一回でも多くのチャンスを与えていただけたら幸いであると日常彼らと接している者として考える次第であります。彼ら留学生の本来の目的は日本語のみの習得ではなく、その国の文化・学術・知識を学び身に付けることであり、それをまっとうすることが次へのステップにつながり、しいては、将来の交流の窓口、国際親善の役割の担い手として成長していくであろう。

さとおやの会のさらなる飛躍を期待し、この会を育て支えていらっしゃる会長をはじめ、会員の皆様に心より感謝を申し上げます。



留学生里親の会に参加して

松澤政彦

留学生里親の会で一昨年の里子は中国の青年で名前は毛君です。

昨年の里子も中国の杜君、今年の新年交流会には両君とも帰郷中で欠席でしたが、大商、留学生委員会からの里子と里孫が昨年同様に来てくれました。

いつもながら感心いたしています。織畠様のお上手な司会で楽しい時間が作れました。きもの姿のよくお似合いの楽しそうな留学生達を見ていると、国境とか、民族とか、言葉とか、そのような垣根があるのも、忘れてしまいます。毎年の恒例の行事にしてほしいと思います。

もう20年以上も前の里子から、毎年お正月に韓国の海苔を送ってくれますが、大阪府立大学の時の里子で現在は韓国の建国大学の教授です。いつも私達のことを覚えてくれています。長く里親をしていますと、そこにはいろいろ困ったこともあります。最近の経験ですと、ある里子は学校へ行かず、働いてお金を溜めることにばかり夢中で、入国ビザが切れてしまい、不法滞在になり現在消息がわからないと言うようなこともあります。

2月5、6日開催されました「ワンワールドフェスタ」「留

学生里親の会」のブースでモンゴルの衣裳を着た松井さんをご奉仕されていましたが、松井さんなかなかよくお似合いで大変素敵でございましたが、このモンゴルの衣裳ですが、現在行方がわからない里子が私達にプレゼントしてくれた衣裳です。時々彼女の国に電話かけますが、判りません。

「ワンワールドフェスタ」大変にぎやかでたのしかったですね。

私の知人でビルマの難民マウン君もビルマの支援ブースで参加活動していました。私の住んでいます富田林市からも、チャングの会、韓国の伝統楽器、太鼓、鐘、ドラ、で音楽と踊りで楽しませてくれました、ブラジルのサンバも楽しかったですね。我々の「留学生里親の会」のブースでは西村委員長も連日のご奉仕、ご苦勞様でございました。ワンワールドフェスタも無事終わりました。宇宙船地球号には60億人以上の人々が乗り合わせています。問題だらけのこの地球号です。航海の安全を祈りましょう。



里親と里子

元 大連外大教授 李 成 起

『屠蘇を注ぐ寸時の正座留学生 中国語英語飛び交い屠蘇祝ふ』

を拝読した時、里子の留学生たちが里親のお母さんを囲んで如何にも楽しい雰囲気の中で、めでたい新年を迎えているほほえましい場面が目の前に浮かんでくるのであった。

いつころから始まったのか知らないけれども留学生は言葉や知識のみを学習するのではなく、里親の家庭に受け入れられることによって日本人の暮らし方、ものの考え方、伝統的ないろいろの民族的な行事に参加したりすることによって、真実の日本と日本人を理解出来る上に、知らず知らずの間に麗しい親身の感情が醸し出されるのであるから、まことに結構な仕組だと思う。

首句の「寸時の正座」は実に巧妙にして的確な捉え方である。

外国では畳を敷く座敷という構造が無く、平時はソファか椅子、腰掛などに座るのであるから日本式の畳の上での長座は窮屈千万というよりも実は無理である。

そもそも日本の正座は中国語では「跪・グワイ」といい、即ち跪く(ひざまずく)ことである。昔から「男児膝下有黄金」と言って男児である以上、そう簡単に屈服を象徴する跪くという姿勢をしないのである。

現今では祖先の祭祀、懲罰以外には滅多にとらない姿勢であるから慣れないという事実の外に心理的な原因もある訳である。中国北方の冬は寒いから農村ではオンドルの構造が多く、食事や接待

などはみなこのオンドル上でなされるし、又「座地而坐」と言っただけで地面に坐るときなどはみな胡座(あぐら)をかく姿勢で坐るのである。正座に慣れない留学生たちが里親から屠蘇酒を注がれる時、義理でも正座の姿勢をとらねばならないが、それも寸時で長続きはしないはずである。

里親について私には極めてありがたい体験がある。10年前、娘と婿が揃って阪大大学院に入学して婿はコンピュータ工学、娘は医学を専攻していた時、仕合せなことに大阪市の児玉さんご夫妻の里子として受け入れられたのである。それ以来十余年間、身内同様に可愛がってくださり、新年、お節句や週日などはもちろんのこと、さらに相い連れ立って名勝地の観光や温泉地に行っただけでレジャーを楽しませたりしたことはその都度記念写真を通じて私らの心を温めてくれたのである。5年前だったか、娘一家が夏休みで帰省したとき、児玉さんご夫妻がわざわざ同伴して私の家を訪ねられたのである。

幸いにして娘と婿は双方の親の期待に背くことも無く、娘と婿はそれぞれ阪大医学博士と工学博士の学位を勝ち取り、今は岡山理科大学の助教授として就職したのであった。

中国の在日留学生は2万人に及ぶと聞いている。無私の愛心に因んだこの里親と里子の心のつながりはやがて日中友好の巨大な洪流として2千年に亘る日中文化交流の歴史に新しい1ページを展開させ、さらに進んでアジアの平和と繁栄に莫大な貢献をもたらすであろうと私は確信して疑わないのである。

● 編集後記 ●

編集局長 田間 貞雄

留学生さとおやの会の「里親・里子」だよりの第二回発行の原稿を里親・里子の方々からお寄せいただきまして有難うございました。第二回の発行は、二〇〇四年三月で、今回は約一年ぶりの発行となりました。第一回発行の編集後記にもありました。第一回発行の発行を希望しては年々二・三回の発行を考えておりました。しかし、残念ながら原稿の集まりが思わしくなく、ここに約一年ぶりの発行となりました。この一年間を振り返ってみますと、前の大坂商工会議所の留学生事業と比較しても、何ら遜色の無い里親・里子の事業を継承しております。これは、ひとえに里親の皆様の献身的なボランティア精神の努力と、サクラクレパスの西村代表幹事・八木先生を中心として各幹事の皆様のご尽力によるものと感謝いたします。また、里子の皆様のご協力のおかげでございます。これから、第三回の里親・里子だよりの発行に向けまして、里親や里子の皆様から沢山の原稿やお写真、そして有意義なアドバイスやトピックスなどをお寄せいただきますようお願いいたします。里親と留学生との絆はこれからもいつまでも続き、終わることはありません。この事業が広く地域の皆様にご理解をいただくために、出来るだけ早く第三回・第四回の会報の発行を考えております。